

## 歴史を学び、語り継いでいく

この夏、ぼくは広島に行ってきました。

平和のありがたみ、戦争によって生まれるものを改めて学ぶことができました。今回のツアーで、初めてぼくは広島を訪れました。広島に足を踏み入れ、戦争の傷跡を巡ることは、ぼくにとっての戦争に対する考え方を考えるものになりました。

被爆者の方々は、みんな生きるのに必死でした。どれくらい必死でどれくらいかわくて苦しかったのか、体験した人にしかわかりませんが、今回のツアーで被爆体験を聞いて、ほんの少し体験者の気持ちに寄り添うことができました。

「ヒロシマ・ナガサキ」という映画をつくったステイヴン・オカザキという監督はこんなことを言っています。「核戦争での苦痛、葛藤、真実が被爆者の言葉に、被爆者の表情や瞳のなかに表れる。」「彼らに起きたことは誰にでも起こりうること。」

オバマ大統領は広島を訪問した際こんなことを言っています。「私たちは一つの家族の一部。」「これ以上私たちは戦争は望んで

いない。」

ぼくはこれらの言葉に強く胸をうたれました。人間はみんな家族。家族で殺し合うことより残酷で醜いことなんてない。ぼくたちは過去の過ちを繰り返すような人間であってはなりません。この傷みを知っていれば戦争をしないという選択が人間にはできるはずです。アメリカの大統領に先に広島に行かれてしまったことは悔しいですが、アメリカの大統領にも負けないくらい、ぼくは戦争を学んで来ました。戦争体験を語ることでできる人が少なくなってきた今だからこそ、今回の広島ピースツアーに参加できたことは、とても有意義だったと思います。ぼくたち人間にはこの戦争の歴史、真実を語り継いでいく義務があると思います。

8月に秩父で、また9月には熊谷で、秩父ユネスコの創作舞台「本は伝えるカギとなり」の再演に出演しました。ぼくは、金子兜太さんの役を演じました。先輩たちが事前学習で、熊谷にお住まいの金子兜太さ

んと本庄にお住まいの大野英子さんの戦争体験を聞き取り、それをシナリオに込めました。そうすることで、お二人の戦争体験を語り継ぐことができ、劇中でまた広めることができましたと思います。ぼくは金子さんの「遺言」を語ることができました。また、治安維持法の犠牲となったお兄さんの遺書である大野さんの「聲の形」を読みとることができました。

自由の森学園高校一年 葭田周作



エストニアにて

大森宗次 絵